

預言者ロトの物語（前半）：ソドムの時代

説明： 預言者ロトは神に従うよう人々に忠言します。

より アイシャ ステイシー

掲載日時 03 Feb 2014 - 編集日時 16 Jun 2014

カテゴリ： [記事](#) > [イスラームの信条](#) > [諸預言者の物語](#)



神が預言者たちを各民族に遣わしたのは、唯一なる神のみを崇め、そこに何者をも並べてはならないという同一の教えに基づいたものでした。そして最後に、神は預言者ムハンマドを全人類に対して遣わしています。彼の携えた教えはそれ以前と同じものでしたが、彼はあらゆる時代 場所、さらには審判の日まで適用されることの出来る、全人類への新たな法をもたらしたのです。クルアーンの様々な章句の啓示には、預言者と追従者たちに起きた特定の出来事や経験に対するの回答が多々ありました。クルアーンの中で語られている物語は、教訓として、また人類の歴史的背景を提供するものとして、そして神の性質を示すものとして機能します。預言者ロトの物語は特に、21世紀においても関連性の高いものです。

世界中の多くの都市には、日中でさえ外を出歩くのが危険な場所があります。それらの場所では殺人が頻発し、個人情報盗まれ、麻薬が蔓延しているのです。近年では欧米諸国の高校生たちの大半が、既に麻薬の使用人や売人らと何らかの形で遭遇しています。アルコールは家庭崩壊 家庭内暴力 反社会的行為の主因ですが、近所の店で手軽に入手出来ます。児童ポルノや人身売買から分かるよう、小児性愛もはびこっています。墮落した生活は容認され、普通であるとさえ見なされます。これらの記述は、恐ろしい、統制の取れなくなった世界観を描きますが、預言者ロトの時代とそう違うものなのでしょうか？

ロトの民が生きた社会は、私たちの時代と非常に似通っています。社会は腐敗し、人々は羞恥心に欠け、犯罪者や犯罪行為は巷に溢れ、ソドムの街を通る者は強盗や身体的被害の危険に晒されていました。街の空気は、健全な社会のそれではありませんでした。ロトの民には倫理観、道徳的模範、羞恥心がありませんでした。蔓延していた同性愛は、影で行われていたわけではなく、認められたライフスタイルの一部となり、性的不道徳と腐敗を助長していました。神はこの街に預言者ロトを遣わしたのです。彼の教えは、唯一なる神のみを崇拝せよ、というものでした。崇拝するということには、神の戒律にすすんで従うことが必然的に伴います。ソドムの民は、彼ら自身の腐敗した生活に満足しており、それを放棄する意思などありませんでした。ロトは彼らにとっての厄介者となり、彼の言葉は無視されたのです。

預言者ロトは、人々に犯罪行為やみだらな態度を止めるよう呼びかけましたが、彼らはその言葉に耳を傾けることを拒みました。ロトは人々に敢然と立ち向かい、叱責しました。彼は彼らの墮落性や犯罪行為、不自然な性的指向について指摘しました。

“あなたがたは主を畏れないのですか。本当にわたしは、あなたがたへの誠実な使徒です。だからアッラーを畏れ、わたしに従いなさい。わたしはあなたがたにこのことで報酬を求めません。わたしへの報酬は、唯々万有の主から（いただく）だけです。”（クルアーン26:161 – 164）

過去20～30年程前から、同性愛が一般的なライフスタイルとして語られることが多くなり始めましたが、神の法、そして3大天啓宗教（ユダヤ教 キリシト教 イスラーム）において、それは認められていません。同性愛者は遺伝子レベルでそれが決められているといった新奇な概念も、イスラームによって否定されます。クルアーンでは、ソドムの民が性的逸脱を最初に行った人々であると明確に記述されています。

“あなたがたは、あなたがた以前のどの世でも、誰も行わなかった淫らなことをするのか。あなたがたは、情欲のため女でなくて男に赴く。いやあなたがたは、途方もない人びとである。”（クルアーン7:80 – 81）

ソドムの民は、羞恥心を感じる事がなくなる程までに墮落を極めました。彼らは公共の場であるかどうかを問わず、不自然な性的行為に耽りました。彼らの中にはサタンがおり、常々そうであるよう、サタンは彼らの行為を華々しく見えるよう仕向けました。ロトが彼らの邪悪な生き方を変えるよう要求したとき、彼らはあたかも彼ら自身が正義の側で、ロトが大罪を犯している者であるかのように、彼を追放しようとしてしました。ソドムの民はロトにこう言ったのです。“

いい加減止めないなら、ルート（ロト）よ、あなたは必ず追放されるでしょう。

”（クルアーン26:167）

ロトは怒りをあらわにし、彼とその家族をソドムの民の悪業から救出してくれるよう、神に呼びかけました。

一方、別のある場所では、預言者ロトの叔父にあたる預言者アブラハムが、3人の客人を迎えていました。その寛大さで知られる預言者アブラハムは、仔牛を丸焼きにして彼らをもてなしましたが、彼らは食べようとはしませんでした。それは非常に異例なことであるため、彼はうろたえました。旅行者は空腹なのが常であり、これら3人がもてなしを拒んだことは、預言者アブラハムを不安にさせました。客人たちは彼の不安な様子を見て、それを解消させようとしてしました。彼らはこう言ったのです。“恐れることはない。”（クルアーン15:53）彼の恐怖心は落ち着き、預言者アブラハムは客人たちが訪れた用件について尋ねました。彼らはこう言いました。“わたしたちは罪深い民に遣わされた。”（クルアーン15:58）

ソドムの民は腐敗した、悪業が容認されると信じた人々でした。残念ながら21世紀における私たちは、無知と悪に対して非常に馴染んでおり、それらに対して正しい態度で対応することが出来なくなりました。人は悪い態度を言い訳して正当化しますが、実際に人々が公に、そして継続的に神に背き、敬意を払わなければ、私たちは憤慨すべきなのです。天使たちは預言者アブラハムのもとを発ち、預言者ロトとその家族の住む、ソドムの街へと向かいました。

この記事のウェブアドレス：
<http://www.islamreligion.com/jp/articles/1872>

Copyright © 2006-2013 www.IslamReligion.com. All rights reserved.